

いっしょに考える「福島、その先の環境へ。」シンポジウム 及びチャレンジ・アワード表彰式開催のご報告

令和3年3月24日（水）

東日本大震災及び東京電力福島第一原子力発電所事故の発生から10年が経過することを契機として、令和3年3月13日（土）に「いっしょに考える『福島、その先の環境へ。』シンポジウム」及びチャレンジ・アワード表彰式を開催しましたので、お知らせします。

「福島、その先の環境へ。」をテーマに掲げ、これまでの環境再生事業の10年を振り返るとともに、令和2年8月に福島県と締結した「福島の復興に向けた未来志向の環境施策に関する連携協力協定」を踏まえ、若者をはじめとする県内外の方々とともに、福島の風評払拭や復興に向けた未来志向の環境施策への理解醸成に資する取組を行っております。

この取組の一環として、一般社団法人 LOVE FOR NIPPON と協働で本シンポジウムを開催し、オンラインにて、福島会場であるナショナルトレーニングセンターJヴィレッジと、東京会場である環境省をつなぎ、福島の未来に向けたメッセージを発信いたしました。

また、プログラムの一部として「いっしょに考える『福島、その先の環境へ。』チャレンジ・アワード」の表彰式を開催しました。チャレンジ・アワードは、未来を担う若い方々とともに福島の未来を考える機会づくり及び新しいアイデアを通じたつながりの拡大を目的とした、新たな表彰制度です。中学生、高校生、大学生等を対象に、原子力災害を経験した福島のこれまでの10年の振り返りと、これからの福島を「こう変えたい」、これからの福島が「こうなって欲しい」という未来や希望に関する、学生の皆様のアイデアや想いを募集しました。

表彰式では、受賞者を表彰するとともに、なすび様、内堀雅雄福島県知事（※福島県内の別会場からオンラインで参加）、丸山桂里奈様、小泉進次郎環境大臣（※環境省からオンラインで参加）を交え、学生たちと福島の未来に向けたディスカッションを行いました。



■開催概要

※敬称略

(1) 開催日

令和3年3月13日(土)

(2) 開催場所

ナショナルトレーニングセンターJ ヴィレッジ(福島会場)と環境省(東京会場)をオンラインでつなぎ、無観客で開催

(3) 主催

いっしょに考える「福島、その先の環境へ。」シンポジウム実行委員会*

※環境省や(一社)LOVE FOR NIPPONなど関係団体を構成員としている団体

オンライン配信の映像はこちらからご覧いただけます：https://youtu.be/mLbC_r7XIeY

【第1部】

■環境再生事業の振り返り

登壇者：環境省 環境再生・資源循環局 参事官 川又孝太郎

本シンポジウムの開会にあたり、東日本大震災及び東京電力福島第一原子力発電所事故から現在に至るまでの福島県における環境再生事業の歩みを映像で振り返りながら、環境省環境再生・資源循環局 参事官の川又孝太郎より、これまでの取組と今後の課題についてご説明させていただきました。



<川又参事官コメント>

環境省はこの10年間、被災地の生活環境を回復するため、環境再生事業に取り組んできましたが、国としての約束でもある除去土壌等の30年以内の県外最終処分は最重要課題として残っております。30年後の将来を見据えた未来志向プロジェクトにも着手しており、環境施策を通じて福島県の復興に貢献していきます。未来のビジョンを皆様と一緒に考え、福島の復興に向けて共に歩みたいと考えております。

■ふくしま未来100人会議 みんなで考える福島の未来

ファシリテーター：立命館大学 准教授 開沼博

パネリスト：なすび

国立大学法人福島大学名誉教授

地球にやさしい“ふくしま”県民会議 代表 渡邊明

檜葉町教育委員会 教育長 青木^{ひろし}洋

一般社団法人ヴォイス・オブ・フクシマ 理事 久保田彩乃

一般社団法人LOVE FOR NIPPON 代表 CANDLE^{ジュン} JUNE

「ふくしま未来100人会議 みんなで考える福島の未来」では、パネリスト5名に加え、福島県民の方とオンラインでつなぎ、環境の観点から福島の未来を語るセッションを実施しました。東日本大



震災直後に 10 年後の未来をどのように想像していたか振り返りながら、震災から 10 年の時を経た今考える 30 年後の未来や、未来に向けて今から自分にできることを語っていただきました。

<なすび氏コメント>

僕は生まれも育ちも福島県です。震災直後は何一つできず無力感に打ちひしがれていましたが、「福島を元気にしたい、もっと夢と希望に溢れた場所にしたい」という想いで、4 度目の挑戦でエベレストに登頂し、「ふるさと福島を命がけで守りたい」と世界の一番高いところから叫びました。「なすびのギモン」という世界初の除染情報番組も始めさせていただき、除染に関わる問題を自分事とすることを理念として行動しています。

2017 年には、チェルノブイリ原発の目の前まで行きましたが、負の遺産を見て同じ過ちを繰り返さないようにしようと、年間に数万人が訪れるのだそうです。そこには、災害に見舞われても、たくましく生きている人がおり、現地のお医者さんからは「放射能の影響で病気になる人よりストレスで体を壊す人の方が多いから、福島も気をつけて」と言われました。自分の経験を通して学んだことを生かしていくのが大事だなと考えています。

<渡邊氏コメント>

私は気象学が専門ですが、震災後は放射性物質の拡散や輸送について研究するようになりました。この 10 年間、大気中の放射能の観測を続けたり、福島県内 4 大学の共同研究で再生可能エネルギーの研究をしたりしています。また地球温暖化問題の観点から、2100 年までの福島県の温暖化予測やリスク評価も行ってきました。

これからの 30 年を考える上では、2030 年の SDGs の達成、2040 年までに福島の電力を 100% 再生可能エネルギーで賄うこと、2050 年のパリ協定の実現を廃炉とともに着実に遂行していくのが課題だと思います。福島の実験をさまざまな形で発信することが SDGs 実現の先駆けになりますし、福島ほど再生可能エネルギーが進んでいる都市は世界的に見ても珍しいので、他の都市も福島を見習ってもらいパリ協定の実現する道筋をつけ、持続可能な社会を創る先駆けの地になる必要があるのではないかと思います。

<青木氏コメント>

私は震災からの 6 年半は除染、放射性廃棄物・災害廃棄物の処理に責任者として取り組み、その後の 3 年半は教育長として子どもたちを見守ってきました。震災当時、復興計画の素案作りに関わり、楡葉町の 10 年後の姿を書き込んでいましたが、「本当にできるのかな?」「やるしかない」という気持ちが半分ずつでした。しかし「笑ふるタウンならは」を中心としたコンパクトタウンという当時の構想が現実的になり、専門家の方から「復興計画を 90%以上実行できている」という評価をいただき、震災前よりも暮らしやすい町になったかなと感じています。

その後は教育長として子どもたちの学びを見ておりますが、子どもたちの中には震災の記憶がある子もない子もいます。放射線教育も含めた震災の記憶・記録を子どもたちにつなげていける学習の機会を作り、「もっともっと地域で子どもたちが元気で輝く町へ」をテーマに、子どもたちが大人になったときに、楡葉町のさらなる復興に貢献できるような人材育成をしたいと思っています。

<久保田氏コメント>

私はラジオ番組の制作、パーソナリティを本業としていますが、震災当時は秋田の放送局にいました。その後郡山市に帰郷し、震災の翌年に一般社団法人ヴォイス・オブ・フクシマを立

ち上げ、震災後の福島に生きるさまざまな人のインタビューラジオ番組を制作し始めました。また、富岡町とご縁をいただいて、富岡町の臨時災害FMにスタッフとして関わるようになり、富岡町から三春町に避難し、仮設の学校に通う子どもたちと一緒に彼らの声を発信したり、今年で閉校する学校の記録を映像で残そうとしたりしています。

私にできることのキーワードは「『ふくしまの声』今の発信を“未来への記録”にする」です。年を経るにつれ、子どもの当事者性の変化を感じており、次世代や県外の方に対して、メディアを通してつなげていくことや、未だに不安を抱えている人、先の見えない生活をしている人もいる実情をメディアで発信し続け、地域のアーカイブを作っていくことが自分の役割だと考えています。

<CANDLE JUNE 氏コメント>

震災をきっかけに一般社団法人 LOVE FOR NIPPON を立ち上げました。震災後の3月14日から福島県の沿岸部に支援物資を運んで炊き出しを行い、震災から3年間は3日に1度福島を回っていたと思います。できないことばかりでしたが、できないのなら、できる人を連れてこようということで、マッチングメーカーになっていました。

これからも福島各地の皆さんと地道につながり、「福島のおかげで世界は変わったよ。ありがとう」という言葉が福島に戻ってくるまでマッチングメーカーを続けていきたいと思ひますし、福島に世界中からさまざまな人が集まり、福島各地を楽しみながらも、帰宅困難区域が残っている現状など、両面を知っていただくためにできることをやりたいなと思ひます。

<オンライン参加者(郡山出身の大学4年生)コメント>

原発を持った福島がこれまで起きたことの反省と経験を生かして、豊かな自然を生かしながら、再生可能エネルギーを100%まで持っていくことで、福島が環境先進地域として日本と世界を引っ張っていけば、持続可能な社会が作れるのではないかと思います。

【第2部】

■基調講演「福島の復興と再生可能エネルギーのちから」

登壇者：飯館電力株式会社 顧問・会津電力株式会社 会長 やうえもん 佐藤彌右衛門

第2部の基調講演では、飯館電力株式会社 顧問・会津電力株式会社 会長の佐藤彌右衛門氏に「福島の復興と再生可能エネルギーのちから」をテーマとして、福島第一原子力発電所事故後に再生可能エネルギー発電事業に乗り出した背景や、飯館電力株式会社の創設の経緯、これからの再生可能エネルギーの展望についてお話いただきました。



<佐藤氏コメント>

私は福島第一原子力発電所事故の悲劇を二度と繰り返さないと誓い、福島のエネルギーを自分たちの手に取り戻し、復興につなげたいという想いから、2011年以降、仲間と自然エネルギーの勉強会やシンポジウムを開催したり、再生可能エネルギーの先進地・ドイツやデンマーク、オーストリアで研修を重ねたりしながら、2013年に会津電力株式会社を立ち上げました。

一方、飯館村は原発事故による放射能の影響で全村避難となり、農業もできなくなりましたが、小林稔さんという農家の方が「農業ができないなら、会津電力のように飯館村で発電をし

たい」とおっしゃったことをきっかけに、飯舘村の住民が自ら出資して、自分たちの土地を提供し、そしてその取組に共感した県外の方々の協力もあって、2014年に飯舘電力株式会社ことができました。

これからは電気も有機農産物と同じように、誰がどんな場所でどんな想いで作ったのか知り、生産者と消費者が顔の見える関係を築くとともに、大量生産・大量販売ではなく、自分たちが必要な分だけ自然エネルギーで電力を作り、消費する地産地消が大事です。それによりエネルギー代が地域に残り、お金が循環して地域の活性化にもつながります。効率、合理性、コスト、利益重視という、これまでのやり方から勇気を持って脱却することで、子供や孫たちの世代に対して豊かでスマートな国を残すことができるのではないかと思います。

■「福島の復興と再生可能エネルギーの未来」プレゼンテーション

登壇者：小泉進次郎環境大臣（※オンライン）

丸山桂里奈（※オンライン）

「福島の復興と再生可能エネルギーの未来」プレゼンテーションでは、小泉環境大臣より再生可能エネルギー（以下、再エネ）を利用するメリットや可能性をお伝えしました。

いま福島県も県産再エネ電気の利用促進の取組を始めたところです。環境省では、2030年までにすべての施設を再エネ100%にすることを決定し、さらに福島県や東京の環境省の一部施設においては、2021年度の電力を福島県産の再エネ電気100%で調達することとしました。また、会津若松市や郡山市とも再エネ連携協定を結んでいる神奈川県横浜市は、東北で発電した再エネ電気を市内の企業に供給する実証事業を始めるなど、自治体間の連携も進んでいます。

さらに、自治体や企業だけでなく、一般家庭も再エネ電気に切り替えることで、福島県の復興を支援できる「被災地応援でんき」の取組もご紹介し、再エネ切替を通じた復興支援を呼びかけました。

※「被災地応援でんき」とは

家庭の電気を「被災地応援でんき」に切り替えることで、電気料金から100円を被災地にある再エネ発電所に毎月寄付することができる、一般社団法人LOVE FOR NIPPONが開始した取組。

URL：<https://minden.co.jp/personal/lfn/>

<小泉大臣コメント>

資源がない国と言われる日本における化石燃料の輸入総額は毎年約17兆円ですが、再エネのポテンシャルは電力供給量の最大2倍と試算されており、日本は資源がない国ではなく、資源があるけど使いきれていない国と言えます。

福島県の土湯温泉では、地熱バイナリー発電で得た収益を高齢者のバスの無料化、学生の定期券の無料化などに活用し、地域の経済、暮らしに役立てていますが、この事例のように国や地域において、発電で得た収益が回っていくような仕組み作りが必要です。

実は個人単位でも再エネ電気に切り替えることができ、福島県の農産物やお酒を選ぶように、電気も選ぶことができます。私も自宅の電気を再エネに切り替えましたが、電気料金が高騰し



たため、電力会社を変えました。ですが、これからの太陽光が豊富な時期には電気料金が安くなるため、また再エネ電気に戻すなど、季節によって簡単に切り替えることもできます。

震災後、アンテナショップで被災地の特産物を買って支援する動きが広がりましたが、これからは、アンテナショップに行くように被災地の電気を買って応援する時代だと思います。

■再エネ電気切替デモンストレーション

登壇者：一般社団法人 LOVE FOR NIPPON 代表

CANDLE JUNE

丸山桂里奈（※オンライン）

なすび

環境省森里川海アンバサダー・

一般社団法人 the Organic 代表理事 小原壮太郎

（※オンライン）

小泉進次郎環境大臣（※オンライン）



このパートでは、小泉大臣のプレゼンテーションで紹介された「被災地応援でんき」に取り組む一般社団法人 LOVE FOR NIPPON 代表 CANDIE JUNE 氏のレクチャーによる再エネ電気切替デモンストレーションが行われました。

CANDLE JUNE 氏からレクチャーを受けたのは、元サッカー女子日本代表で、東京電力女子サッカー一部マリーゼに所属中に福島第一原子力発電所での勤務経験もある丸山桂里奈様と、福島市出身で、東北地方の復興を願って青森県から福島県まで続く「みちのく潮風トレイル」のルート 900km を徒歩で踏破するなど、精力的に復興支援活動に取り組んでいるなすび様です。

お二人は CANDIE JUNE 氏から説明を受けながら、デモ用タブレット機で再エネ電気への切替を体験しました。申込に必要なのは、検針票とクレジットカードのみです。「被災地応援でんき」のホームページにアクセスし、①メールアドレスの入力、②氏名、住所等の申込情報の入力、③クレジットカード情報の入力、④福島県内の発電所の選択という、わずか4ステップの操作だけで5分足らずで「被災地応援でんき」に切り替えられることに感嘆していたお二人。

解約手続きは新たに契約した電力会社が行い、電線やメーターも現状のものを引き続き使用できるため、付け替え工事は基本的に不要で、利用者側の負担が少なく、スムーズに切り替えられます。

「電力会社の倒産や災害等により、電力の安定供給に影響はないのか」という丸山さんの質問には、CANDLE JUNE 氏が「電力の安定供給は契約する電力会社ではなく、送配電会社に確保する義務があるため、どの電力会社を選んでも変わりません」とお答えし、お二人とも再エネ電気切替に当たって感じていた不安が解消されたようでした。

<丸山氏コメント>

再エネ電気への切替はとても簡単ですし、地球環境に貢献できて復興支援にもつながるのが良いですね。

<なすび氏コメント>

アナログ人間の僕も、ものの5分ぐらいで申し込めましたので、非常に簡単です。(飯舘村の発電所を選んだので) これで飯舘村を応援できるんですね。

<小原氏コメント>

私はオーガニック(有機農業)を軸とした持続可能な社会づくりに向けた諸活動に取り組んでおり、農地の上で太陽光発電も行うソーラーシェアリングを実施している農地に何度か伺ったことがあります。そこで農作物が不作でも売電収入でペイできている現場を見て、豊かな農業を有する福島こそ、再エネと農業で再生していくのにふさわしいのではないかと感じました。私たちの事務所も福島県産再エネ電気にしようと思いますが、このように気軽に再エネ電気を使うことで持続可能な社会作りにつながると良いですし、官民の垣根を越えて仲間を増やしながらみんなで取り組んでいきたいと思っています。

<CANDLE JUNE 氏コメント>

スマートフォンで簡単に特定の再エネ発電所を選んで購入できるなんて、ちょっと前までは考えられなかった。福島県産の再エネ電気を地産地消すると共に、電気自動車を使っている首都圏の方が福島に遊びに来るときに充電できるチャージポイントをたくさん作っていただくことで、福島の電気を使いながら、福島を楽しんでいただく動きが広がればと思います。

<小泉大臣コメント>

日本酒に産地があるように、電気にも産地があるのがこれからの当たり前になると思いますので、食べ物の産地を気にするように、電気の産地も気にかけてみてください。

CANDLEJUNEさんから電気自動車のお話がありましたが、環境省は電気自動車の購入時の補助金を80万円に倍増しました(※東京都は環境省とは別にさらに60万円補助)。補助を受けられる条件は自宅の電気を再エネ100%にすることです。つまり、電気自動車と再エネがセットの時代を作るという想いで実施しています。さらに、自宅に電気自動車の充放電設備を付ける場合は最大195万円の補助、新宿御苑に電気自動車で行った人は駐車場代金を無料にするなど、電気自動車の利用者のメリットが増えるように考えていますので、再エネと電気自動車で環境に貢献していきましょう。

【第3部】

■いっしょに考える「福島、その先の環境へ。」チャレンジ・アワード表彰式

プレゼンター：環境大臣賞：福島地方環境事務所
室石泰弘所長

福島県知事賞：福島県
渡辺仁生活環境部長

福島教育長賞：福島県教育委員会
鈴木芳人教育次長

入賞：福島地方環境事務所 室石泰弘所長

特別賞：一般社団法人 LOVE FOR NIPPON
代表 CANDLE JUNE 氏



表彰式では、中学生部門、高校生部門、高専生・専門学生・大学生部門の3部門から選出された最優秀賞：環境大臣賞、優秀賞：福島県知事賞、優秀賞：福島県教育委員会教育長賞、特別賞、入賞の受賞者をプレゼンターが表彰しました。

※チャレンジ・アワードの概要は以下よりご確認ください。

<https://www.env.go.jp/press/108901.html>

※チャレンジ・アワードの受賞者の詳細は以下よりご確認ください。

<https://www.env.go.jp/press/109288.html>

■内堀福島県知事メッセージ「『FUKUSHIMA』の未来」

登壇者：福島県 内堀雅雄知事（※オンライン）

続いて内堀雅雄福島県知事に、東日本大震災からこれまでの10年を振り返るとともに、福島の未来への想いをお話いただきました。



<内堀知事コメント>

福島は2011年に地震、津波、原発事故、風評被害の複合被害に見舞われ、世界的にも有名な地名になってしまいました。そんな福島の未来を拓くキーワードは「光と影」そして「挑戦」です。

汚染土壌の中間貯蔵施設への搬入、避難指示解除など、復興が進み、福島県産の農林水産物の輸入規制をかける国の数が54から15まで減るなど、明るいニュースがある一方で、未だに3万5000人以上の避難者がおり、住民の帰還が進んでいない地域の存在、福島第一原子力発電所の廃炉・汚染水対策、農林水産物へのマイナスイメージなど、重い課題を抱えています。これからも影を光に変えていく挑戦が必要です。

その挑戦のひとつが「被災地発のイノベーション」です。日本で3番目に広い面積を持つ福島では、地熱発電、風力発電、木質バイオマス発電、地熱バイナリー発電、メガソーラーなど、さまざまな再生可能エネルギーからの発電を行い、原子力に依存しない社会を目指しています。昨年3月には、浪江町に世界最大級の水素製造拠点「福島水素エネルギー研究フィールド」を開設し、再エネ由来の水素を2020東京オリンピック・パラリンピックの会場に供給予定です。環境省とも連携協力協定を締結し、2040年には県内で再エネ電気100%とすることを目標とし、「福島県2050年カーボンニュートラル宣言」も掲げています。

諦めない魂が希望につながります。これからも「チャレンジ県ふくしま」として、環境施策を含め、さまざまな施策に挑戦し、復興の地を目指してまいりますので、温かいエールをよろしく願います。

■ふくしま未来トークセッション

ファシリテーター：環境省 環境再生・資源循環局 主査 寺澤峻之

登壇者：環境大臣賞受賞者2名 福島県立ふたば未来学園中学校2年 林佳瑞^{かずい}
福島県立福島高等学校1年 守谷和貴

福島県 内堀雅雄知事（※オンライン）
丸山桂里奈（※オンライン）
なすび
小泉進次郎環境大臣（※オンライン）



「ふくしま未来トークセッション」では、まず最優秀賞である環境大臣賞を受賞した林佳瑞さん（作品名「里山モデル福島への道」）、守谷和貴さん（作品名「蝶の研究から学んだ『自然と共生する福島』の実現方法」）に受賞作品のテーマに沿って、これから起こしていきたいアクションや呼びかけたい提案についてお話をいただきました。

<環境大臣賞・福島県立ふたば未来学園中学校2年・林佳瑞さんコメント>

福島を人間とその他の生物が共存する里山モデルとして再出発していけたらなと思っています。昆虫が苦手な子どもも巻き込んで、ビオトープを作ったり、観察会を行ったりして、福島県に貢献したいと考えています。

<環境大臣賞・福島県立福島高等学校1年・守谷和貴さんコメント>

僕は福島県内で蝶類の調査をしていますが、昔に比べてその数が減少しています。蝶は自然のバロメーターと言われていて、蝶の数が減っているということは、その土地の自然環境に変化があったことを意味しています。これからの未来に向けて、福島豊かな自然環境を保全して、魅力を発信する方法を3つ考えました。

- ① 再エネの開発のために山林を切り開くのではなく、都市部の太陽光発電や小型の風力発電から始める。
- ② 県内産樹木の需要喚起や天然の草原を利用した牧場・スキー場の運営
- ③ 自治体での自然環境管理を専門とする地方公社を組織

自然の営みをテーマとした体験型プログラムによって、次世代に自然の魅力を継承し、30年後も60年後も蝶が福島に美しく舞っている光景を残していけたらと思います。

林さんからの「2050年のカーボンニュートラルの実現に向けてどのように取り組まれますか」という質問には小泉大臣が「カーボンニュートラルに向けた法案を提出しています。法律にすれば、海外にも日本のやる気が伝わりやすくなります。また、再エネについては地域の皆さんが合意しやすいような新しい仕組みを法律に入れて、2040年には福島の再エネ100%、2050年には日本全体として脱炭素を実現できるようにしていきます」と答えました。

また、守谷さんからの「今後、福島の再エネ推進はどのような構想で進めますか」という質問には、内堀福島県知事が「まずは2040年に向けて福島での再エネ100%を達成し、福島がエネルギーを地産地消できるようにしたいですね。その上で、発電量を増やして県外にも供給で

できれば、再エネの先駆けの地、そして原発事故からの復興のシンボルになると考えています」と答えました。

その他の受賞者からもさまざまな提案が発表され、福島県の未来に向けてできることが話し合われました。

<福島県教育委員会教育長賞・福島県立郡山高等学校2年・秋山風凜さんコメント>

「ふくしまナラティブ・スコラ」（福島県環境創造センターが主催するプレゼンテーション講座）で未だに福島へのネガティブイメージが根付いていることを知り、それを払拭するために、高校生が福島の情報やアイデアを発信する拠点を作りたいなと思いました。

<入賞・福島県立福島東高等学校2年・央戸結実さんコメント>

福島県の住民が参加できる議会を開いていただいて、国の仕事に直接携わっている方や県庁の方にお話を伺うことで、少しでも疑問を解消して「聞けて良かった。またここに住めるな」と実感できるような環境行政を展開していただければと思います。

<福島県知事賞・福島県立只見高等学校2年・三宅実美さんコメント>

私は東京生まれ、東京育ちですが、只見町に山村留学しています。只見町は助け合いの精神で成り立っていて、その関係性が持続的だと感じました。この相互扶助の輪を福島、都市、世界へと広げて持続可能な社会を目指せるのではないかと思います。その一歩として、只見町の空き家をワーケーション施設として活用したら良いのではないかと考えています。

最後に参加者の皆様に向けて小泉大臣からメッセージを送らせていただきました。

<小泉大臣ご挨拶>

受賞者の皆さん、改めておめでとうございます。皆さんに最後に紹介したい本があります。「福島 環境再生 100人の記憶」です。この本に登場する岡本全勝さんという復興庁のトップを務められた方の言葉を紹介して終わりとしたいと思います

「福島を支援します」と言うてはいけない。
「支援」ではなく、「責任を果たす」でしょ。
津波被災地での復興は支援でも、原発被災地の復興は責務です。
これは忘れてはならない基本です。

この言葉は本当に重いと思います。私は環境大臣としても、環境大臣ではなくなったとしても、一個人としてもこの責務を果たしていきたいと思ひますし、皆さんも機会があったらぜひ本をめぐってみてください。

震災から10年という節目は、区切りや終わりではなく、新しいスタートだと思ひています。皆さんと一緒にこれからも福島の実の復興のために頑張っていくので、これからもよろしくお願ひします。